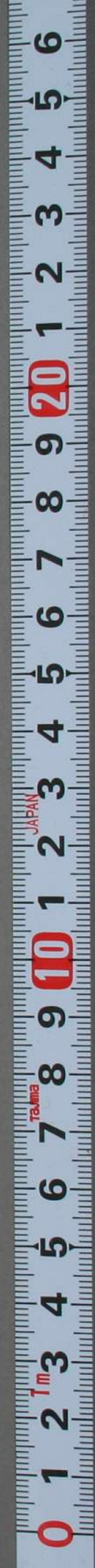




大日本國開闢由來記
卷凡
一例

2697
2
13



2697
2



日本國開闢由來記

凡例

一 此書ハ我邦の大古國を開きまひりし由來を世に弘く知しめんがため我邦の國史古典の中より專俗小通し易きやうを旨とし、抽出せしめたるをその名を假名日本紀といふをせしめあり。今の世に稗史小説の專善を勸惡を懲ことを説ふも加ふ夾画といふものを以てあれ依て先本文の意義を應養しむるハ婦女總書乃こそを讀み領解し易く情み適問を遣の便宜として頗戲場を看るに類似するものもまた人々に愛翫せしむ。今此書其體裁をも彼れ倣くその様を模たせども此は正史傳記等の實事をそのまゝに記するもの



なるとを。彼稗史小説の奇を説怪を譚く。人の意を動情を迎ふ如き。妄誕をのふれと能く其を。讀者の厭倦を生じ易きは。素より言までもあつて。己が身の生くる此日本國の。世界萬國に勝る靈威ある國土なるをも。知れ。本報の心なきとき。ふる。神明の冥應を背。天地の條理を戻ぬを。不祥あるより大なるは。然のそら。此邦人の殊方と異なる。天稟自然性質に。所謂日本魂あることを知れ。遂に怯心のとなりゆく者。世は多有んことを慨す。古事記。日本紀をえり。め。其他の諸書より。参採く。些も私の修飾を加。山野の鄙夫。治綱の老姫も。通曉易きを。旨く。此書を著せり。のなきを。その體裁の稗史小説に類似たるを以て。同觀ことなると。

一 道の天地自然の性は。率ふも。其教を設るも。各國その風土小由り。差別あり。天竺などの。風俗あり。頑愚なる國人を教化むと。する。瞿曇の如く。地獄極樂因果報應等の。種々の方便を設く。あは。試導く。これその風土に相應たる。教誡なり。漢土の如き。民の心を本として。教を立ると。その國土を。假令天下の主なりとも。暴逆ありて。民の心を失ふと。れ。之を伐。之を放。其位に代。道を。た。り。故に孟子も。民為貴。社稷次之。君為輕といひ。土神穀神。社壇なりとも。早魃洪水などの。變類ありて。之を禦捍。こ。を。其社壇を毀く。之を更置。況て。之を。次。の。國君の。民を治ること。能く。暴逆ありて。民の心。違ふと。多。れ。

明君出で其位ふ代るも皆そは風土に應トく聖人の立る。漢土の道なり。それらとむまて格別みて。我日本國の皇統を天津日嗣とのこと天上の高間原に在りて所の天照大御神の御子孫ありて天つ日の御跡と嗣せさすとの稱なること古事記日本紀などふの事を知ひ。續日本紀の歌ふも。苗刺天照國の日は宮の聖の御子とひひ。我邦の昔の世人の普く知ちることなり。まて萬葉集の長歌も天地の初の時に久堅の天の河原ふ八百萬千萬神の神集々いひて。神分々一時天照日女の命。天と知れぬと葦原の瑞穂の國を。天地の依相の極。知れぬ神の命と天雲の八重搔別く。神下座奉り。なご詠も天照大御神の高天原を知れ。そは御孫瓊々藝の命。よの地界へ降臨さすひたることを

いなるみ。君を君として立たる國土あるが故。攝家清家の家々も皆天上より倍従来く事奉たる。神人の裔孫あり。開闢の太古より君臣の名分定まて。動揺あらず。天皇の皇統も一系ありて擾亂たまはざ。然るにたゞ其皇子源平等の姓を賜て。二ひ臣下の列ありたまひさかた。たゞひ皇子親王とのども。再姓を除く皇位を継ごすひたるよのやなれば。靈異の尊位ありまて。故に武烈天皇の如き御所行まて。殘忍しめて。孕婦の腹を刺し。其胎を觀人の頭髮を抜く。樹に登らしめ。之を射墜たすなどの大惡逆も。崩御たまふまで。臣下に誰一人これと弑奉んとかうものもな。天皇と仰奉たるも。君臣の名分一定て。安に動揺さざれば。風土の然らむも。由るものなり。故に天下國家を治る補翼

とある聖教を採。その文字由緒と今日の必用とを漢土と君臣の義を
いふに相違あるを況。西戎墨夷などの例を以て論をきこみあらし
るなり。此篇へ其降臨の確實なること。皇統の隆き天壤ととも窮なき
神勅の正證あることを普く世に告諭んが為。抄述するものなるを進雄命
の大地界へ降臨とす。その七世の孫大國主命の。此國土を瓊々藝命に
讓奉たること。神劍八咫鏡の國家を衛護たまふ。靈驗の炳然たる
ことを記す。胡元の軍艦を西海の浪に覆没し。十萬の軍兵を塵ふぞ
事に筆を閣く。天地の剖判より。磐戸隱などの幽玄して倉卒に領會し
がたし事ども。いづる省て載ざるなり。

一 我日本國の地。殊に異域に優たる所。以て北極地を出るものと三十度より

四十度の間。正帯の處に在る。寒暑其中を得。地は南北に陟。東西に
跨る。四方に海を環す。土地膏腴。五穀豐饒なり。草木繁茂。果實よく
熟成。金銀銅鐵鉛錫の類。すべて國土に生ず。一切缺乏なる物あることなく。
殊に世界最第一なる粳米を。六十六州の間。産する地なく。志も刀劍乃
銳利なること。全世界中。比類なく。近海に晶石多し。大船を寄
るに便宜から。且人民衆多。他國に數倍す。天賦の良質あるを以て。
清潔を好。神を崇。義を重。ざることを。此土に生を受たる人の自然
より出。たも淳樸質實ありて。勇氣あるが由。大古に。これ人の道と
いふことも。忠義孝貞などの名目も。なれど。其行事の道。違ふもの
少く。大伴氏の遠祖天押日命の誓に。海行は。氷付屍となり。山由りた

地多き國土ありてその百千倍を以て我疆界も充ちるも尚劣ぬべし譬を
石瓦も大なりとも珠玉の小なるに比べれば如く土地の廣狹を以て較
匹なきものありてあり。

言語の國土は疆界を辨別なき自然のものなり。唐土萬國の總て用語
を先ありて、辭語を後ふも、天竺和蘭の書等皆然り。獨我邦の辭語を
先ありて用語を後ふも、書を讀といへば、書は辭語ありて讀む用なり。讀書と
いへば、讀といふ用語を先ありて、書の辭語を後ふも、辭語の本ありて君主
のごとく、用語は末ありて臣民の如し。我日本國の如く、此言語を以て事を
辨るゝと、我皇統の一系に、天地と與ふ窮なき寶祚も坐して太古
君を君として立ちて、坤輿中も冠し尊き國體なるものと。此言語ありて

分る。自然のものなり。且我邦へ昔より諸の事物を萬國も採り用ふ
ものと。猶貴人高位の人の身自一切の事物を管作となく、惟臣下庶
民も命く之を造り、之を採り用ふが如く。且、視聽言動等の機會を
なして、耳目口鼻等の頭上も在り、下胸腹四肢の根本となるが如く、我邦
國體の大も萬國も冠し、所以も、且、此等の例を以て、準知らるるを、
あとなく、且、然るを、明の宋景濂が、日東の曲も、侏儒逆讀といひ、例の
已に國を中華中國と稱し、他を卑んぶる心あり、これを逆するといふも、
強み谷むべきことあり、且、物部茂卿、太宰純など、此邦の人として、
妄に漢土も左祖して、ことを目も、田環顛倒の讀といひ、大なる僻事あり、
却て我邦の言語を正して、異方の言語を顛倒せる所以を、知る、偏心

より起るとあり。論も足ぬものとぞもなり。

一 太古の年数へ弘仁曆運記に載るところも皆荒唐説あると。後人妄み採る。まこと日本紀神武天皇紀に屢入たるなりと或人のいふ。然るにまこと暫其説に従て。二百七十九萬の六字を省るなり。その年数も氣運の旺賤と變革あるに至る。卒爾に解説されたる多く。此書に唯まこと婦女總髻の看得らるべきやにと記たるものあり。第一十回も畧その一端をいなるのまこと審悉ある。天日嗣辨に記載する。此もまことを省るなり。

一 舎人助岩垣松苗が國史畧に松永貞徳が載恩記の説を載て曰。豊臣太閤嘗て朝服を關下の施藥院に著しとれ。數天顔を拜するなり。

感激し。人謂て曰。微賤身より起て人臣の位を極る。天恩實に深し。蓋吾母昔朝家式微なす。一時に當て後宮に居る。一賤役を奉り。一日不圖龍躰に近づきたる。有身そのまこと出て尾張の人を嫁り。吾を生たる。松苗按。豊太閤に我邦古今無双の大英雄あり。其行事の確落する。まこと日月の皎然ある。如くあり。曖昧ある。托言をひく。自貴種と稱が如き。卑劣心にかうする。故に此戴恩記のいふところを断て實言となす。世に豊太閤の嘗て吾母日輪の懐に入と夢を吾と生たるとのまこと。傳へ。隱然。みそは皇胤ある。まこと。實にそれのまこと。朝廷を憚るまこと。みそ。國家の禮義を思ふまこと。施藥院の一語に偶感激喜悦の餘み出る。かりまこと其實を泄し。まこと。抑まこと大政所の日輪の夢に托て言ふなり。

或の夢にその兆ありしあり。いづれも豊公の興たまひし。數年の間、亂を撥正し、天子を翼戴。諸候を亂合て、法を將來に垂て、武將萬世の軌則と爲さる。大智大勇を兼備し、その大殊絶し、その觀望、其種あるを固く、必然なきとなり。そは我神國の大外國と異りて、天下に即一人の天下あり。天子の實に天上の人ありし。王公將相とりども、悉皆その種あるなり。故に古今の英雄の將相の位に至る、天下の推を執し、人の微賤の胤なき。曾くあるとす。平相國の如き、固より皇胤なり。鎌倉の右大將、北條氏、足利將軍、織田右府の如きも、皆桓武清和の皇裔なり。然らば、豊公の系、全く戴恩記ふこと、實言に、証説、非ことを知る。世に豊公の凡種奴隸の出身ありとするといひ、然る中、さかたなりといひ。此説實に其理あり。

あるとす。思ふが故に、今此小舉ぐ。世に知しむるものあり。指漏漁者、竊ひあり。豊公の此事を妄ふ言さる。天皇の大政所、堅く誠をいひし。故にこれをいふことを得ざりしものあり。一説に、豊臣大閥へ、後奈良院の落胤あり。母は持秋中納言保薦卿の尾張に配流せらる。頃、同國御器所村の獵師の女に逢く。産せり。由縁を以て、宮中奉仕して、遂に龍體に迹つて奉て、懷孕ありしといひ。然もあつたことあり。

一
我邦の太古の文字ありて、日本紀の改み。推古天皇の御宇に、異域の典籍の傍に、神代の文字を記す。之を讀し、めわじりしを、名を文字ありしこと、明晰され。その三輪の額字、桃尾井磨、印章をとり用ふる外、鹿嶋神社、三輪神社、彌彦神社、鶴岡八幡宮、大和法隆寺、其他の神社などの庫中、古昔より傳ふる神

字の書と藏するのそめく。何不分て世に用とてなされば之を知者も多有さうしせ。
この頃の先達これを比校辛苦して漸に讀得たるものを採く。これを目錄の額縁に
び大極木の圖説の上下に記せざれば我邦の淳樸質直なる太古の易簡あり
て煩きことなき世に強よ文字を用ることなくして足み。人も漸に蕃殖事
も彌重沓なり。より文字典籍は始なり。一切の物を異域より採く
用ることみなう。悉皆神の幽藪たることにて。却て我邦の寰宇の中
み於く。萬國に傑出。至貴ことを觀るとりなること。前も既も言るが如く
かゝるを今の世にても。日本魂を確立す。私の好惡を去て異域の善ことを採
て用く我邦の物とせん。強に漢土と西戎との差別論。論べることにあはば。よも
そあり。先皇の御遺意あり。より國體に合るものといふをなさなう。然を已

好惡とてころ不辟。名聞利慾を覆味され。取捨その宜を得ざる。これ世の害
とかり。ことごとく。淺少不あ。愆愆のことに私心利己を去。公平の意を用て。國家
の爲に遠慮。ことなり。我邦衣服器械の制度。甲冑兵器等の形狀の所
謂神代の銚頭槌の劍などの圖。不見。この物。採とて。その佗。明か
こと。記たる書。典もあ。採を。今も在て。知く。事。多。予。相識者
吉田無言翁は。説ふ。日の東より出るとも。其。實。地。の。左。轉。なり。草。の。蔓
も。左。に。纏。絡。人。麁。も。左。に。入。る。腸。の。左。廻。る。弓。射。も。左。に。放。ち。文。字。も。左。に。運。こ
と。は。た。だ。う。あれ。天神の御心なき。太古の社を左にせし。も。自然なる。よ。と。を
知。ま。たり。漢。土。人。の。ひとり。社。を。右。に。な。す。他。を。卑。し。め。其。を。誇。り。佳。事。と
思。ひ。て。は。り。世。を。保。得。さ。る。邦。人。ら。が。の。言。ひ。託。して。自。己。國。の。真。の。道。を。去。專

彼不傲んとするは、いとも悔恨とておぼせり。此翁の繪事、小珠、小巧ありて、我邦の學、不深く意を注ぎ、太古の衣服器械など、其名も由り、その實を覓、檢敷く、畫出さるること、この採用、きこるも、いそぎ、不慮すること、も、多く、又、畫工國芳の創意より出たることも、多有ど、是、婦女童幼の之を看ん、たふ、を、厭倦を放遣させ、睡眠を催起さるんと欲す。夾加るとあるを、盡く、太古乃、真形なりと思ふこと、なれ、讀者よく、此義を領會すべし。

安政三丙辰歲春二月

一夢道人指漏漁者誌

日本國開闢由來記卷一

指漏漁者編

第一 藪雲の神劍世間不出現、國家の護となる

大少の二神天下を經營て鴻業の基を建

進雄命、天上の高天原より出雲の國に、簸の川上、降臨たまひ、其地を領したる者、名を脚摩乳といひ、妻が名、手摩乳といふ。此者、越の國に、八岐大蛇と字號り、之を斬り、其害を除き、まひ、天に、藪雲の劍、まこの名、草薙の劍、といふを得たまひ、是を神劍なり。吾私のもの、とて、安づき、りのよ、あ、び、の、ま、ひ、く。天の神の御許、に、獻じ、ま、ひ、く。後、脚摩乳、が、女、奇、稻、田、姫、を、妃、と、し、俱、不、住、た、ま、つ、ん、所、を

覓もとまひて。出雲いづみの國くには清地すがといふところところに到いたり。其地そのちの風光けいさを眺望みながす
すすひく。吾われ此地このちに到いたり。心清こころすがくくくなりぬ。ここも吾宮居わがみやゐを建たて住すむ
地ちなるべしと云いふひく。其地そのちに宮みや處ところを營造つくりせしまふ此御詞このみことばより
く。其地そのちの名なを清すがといふべしと。後のちより須賀すかといいふなり。その宮殿みやどのを
修造つくせしまふ時ときに詠よむまひひ御歌みか。

彌雲やたの。出雲いづみ彌重垣やへはまあめあ彌重垣やへ造る。それやへがまは。

此御歌このみかも。御妃みきさ奇稻くいな田の姫ひめを棲すましめたりんが為ため。おれ八重やへがたの

宮居みやゐを造つくせしまふといふ意を詠よむまふといふなり。今いまの世よに

も人のれれといふ詠むなり。三十一文字の歌乃な最初さいしょあり。句意くご

絶妙くわつめうなるなりといふなり。此の御歌このみかの意ごを略りやくし釋しやくば八重やへ

垣かきのや。彌やの義ぎあり。いやぐらへは重かさなる雲くもといふことにて。おの
雲くもも。青雲あせ白雲しろくもの差別さべつあり。白雲しろくもは降ふる雨あめとなり。ところららは平常つねは
視みるところの雲くもといひ。青雲あせは。大虚おほの中なかに充満みちみす。重かさなる
氣きの仰あやむなり。或あるは視みる。蒼あざ々々といふなり。精微せいゐの氣きは。天地てんち萬
物ぶつも。唯ただこれ氣きを以もつてつ繋つ維ゐ保たも持たむなり。天あま上うへよりこの氣きを
以もつてつ壓おさ覆おほひ。人もななふももも。悉ことごと皆ごと此氣このきの中なかに住居すます。おれ氣きを
呼吸こそして。生命いのちを保たもつなり。自己おのれが身みの此氣このきの中なかにあるありことを知し
ざるなり。猶なほ魚ういの水みづ中なかにいりて。水みづを知しざるなり。近ちかくいて。眼めも
遮さらら糸いとど。高たかく仰視あやむなり。青あせく視みゆるが故ゆゑ。白雲しろくもは對あひあひを
青雲あせといひ。まま彌重やへ棚たな雲くもともいひ。棚たなは横よこに靄もくなり。ししくく



進雄命
天蘇雲の
劍を得て
天津神に
獻んと
志保の處

粟^{あは}棚^{たな}の^ごく^たを^たる^せり^の名^なあり。五百重雲といへも。その重粟^{あは}
も^るより^い言^な名^なあり。天孫^{あまのみこと}降臨^{くだり}の段^{たぐい}。稜威^{さか}道^ち別^{わか}く^{天降}
ま^ふと^りる^も。その棚雲^{たなぐも}ハ幾重^{いくじゆう}ともあ^く重粟^{あは}て^りる^もめ^あみ^{稜威}
の^かを^いり^別ち^道た^らと^りる^道を^つけ^ること^をい^つる^{あり}。その
八雲^{やぐも}起^あり^りと^いふ^と發語^{はつご}あり。出雲^{いづも}とい^ふ。出雲^{いづも}とい^ふ。出^いて^立昇^{たか}る^雲とい^ふ
あ^とい^ふ。その出雲^{いづも}を^兼く^彌重^や垣^{かき}とい^ふ。宮居^{みやゐ}の^塙を^幾重^{いくじゆう}も
建^た營^{えい}く^嚴密^{みつ}不^ふ固^こ守^しせ^りと^いふ^御意^{ごい}あり。出雲^{いづも}とい^ふ。國^{くに}の^名も^此
御歌^{みか}を^起る^り。中^{ちゆう}の^地を^出雲^{いづも}とい^ふ。八雲^{やぐも}起^あり^りと^いふ^詠
ゆ^もも^いる^べし。は^ちも^いる^べし。嬌^{こゝろ}を^隠せ^置ん^が為^な。この八重^や
垣^{かき}の^造り^かと^辭を^重て^のこ^もい^らる^べし。奇稻^{きいな}田^で姫^{ひめ}を^愛し^れる^べし。

御意^{ごい}の^深長^{ふさぎ}こ^とを^含有^ふく^詠せ^たま^ひら^るべ^し。吾^{わが}彌^や重^{じゆう}垣^{かき}
と^造ん^と作^しる^べし。此^{この}宮^{みや}の^為も^彌重^や垣^{かき}と^造る^べし。唯^{ただ}雲^{ぐも}の^うを^い
の^こも^いら^るべ^しと^釋も^あら^るべ^し。
是^{こゝ}に^足摩^{あし}乳^ち。汝^{なんぢ}の^我宮^{みや}の^首と^あれ^と。これ^須賀^{すか}の^宮に^事を
仕^{つか}さ^すま^ひら^るべ^し。奇^き稻^{いな}田^で姫^{ひめ}の^生ま^らる^べし。八^や島^{しま}士^し奴^ぬ美^み神^{かみ}と
り^へ八^や島^{しま}士^し奴^ぬ美^み神^{かみ}ハ^大山^{やま}津^つ見^みの^神に^女名^なハ^木花^{はな}知^ち流^{りゅう}姫^{ひめ}と^娶る^べし。御^み子^こ布^ふ波^な能^の母^{はは}
遲^{おそ}久^く奴^ぬ須^す奴^ぬ神^{かみ}と^生た^まは^るべ^し。此^{この}神^{かみ}游^{あそ}遊^{あそ}美^みの^神の^女名^なハ^日河^か姫^{ひめ}と^娶る^べし。御^み子^こ深^{ふか}淵^{ふち}
の^水夜^{みづ}禮^れ花^{はな}の^神と^生た^まは^るべ^し。此^{この}神^{かみ}天^{あま}之^つ都^と度^た閑^{かん}知^ち泥^ぬの^神に^女名^なハ^布帝^{てい}耳^{みみ}の^神と^娶る^べし。御^み子^こ天^{あま}之^つ
奴^ぬの^神と^生た^まは^るべ^し。此^{この}神^{かみ}布^ふ怒^ぬ豆^{まめ}奴^ぬ神^{かみ}の^女名^なハ^布帝^{てい}耳^{みみ}の^神と^娶る^べし。御^み子^こ天^{あま}之^つ
冬^{ふゆ}衣^ぎの^神と^生た^まは^るべ^し。此^{この}神^{かみ}刺^さ國^{くに}大^{おほ}神^{かみ}の^女名^なハ^刺國^{くに}若^{わか}姫^{ひめ}と^娶る^べし。大^{おほ}國^{くに}王^{わう}の^神と

生たす。此大國主の神ハ素盞鳴の命ハ七世の孫なり。大國主の神ハ五の名
有り。大穴牟遲の神とも。葦原色許男神とも。八千矛の神とも。宇都志國玉は
神とも。此大國主の神ハ兄弟八十神有り。此兄弟といふハ父と同一
なる兄弟ハあり。其遠祖より親屬あり。今より從兄弟再從兄弟三從
兄弟など。むろく指ていふのと見えたり。然ども皆大國主の神ハ國を避て
從奉り。唯この大國主ハ神の。此豊葦原の瑞穂の國ハ。後ハ大倭の國
とも。大日本國ともいふ地を領したまひ。素盞鳴命の女。須世理毘賣を嫡
妻とす。すまひ。出雲の國ハ出雲郡宇迦志郷の西あり。後ハ鰐淵山といふ
地の山本ハ宮居したまひ。此大國主の神ハ胸形の奥宮ハ住たまひ。
神の女。多紀理毘賣を娶。阿遲鉏高彦根の神と。妹高毘賣命又の名ハ

下照姫と生たす。此阿遲鉏彦根神と。今ハ加茂の天神ともをたたり。すこ
神屋楯比賣命と娶。御子事代主の神を生たす。八島牟遲の神
の女鳥耳の神と娶。御子鳥海の神と生たす。そも天地の剖判ハ始より。
幾萬歳を歴し。いと浩邈なるこの世の事ハ曖昧あり。知し。つら孫ど。
素盞鳴命。此土ハ降臨す。國の基いとより建。此大國主神ハ
る。幾許の歳を過けん。後世より。其年歴といふ。悉皆荒唐にて
據らざることなり。素盞鳴命の女須世理姫と嫡妻とす。人といふ
ことも。人の世よりこれを聽きたる時代の大小違やう。いれども。神ハ
隱身といふ。幽冥ハ其身を隠す。今も世に在せども。妄人の眼ハ
あつり。幽顯分界とす。神と人との隔おのほ。定て後の人ハ世



大小異あることありき。され年数の事及こまらねることに至ても、決して臆測を以て論ずべきことあり。さて此大國主の神への豊葦原の中つ國を經營造固んとて、出雲國此島根郡の美保岬に到坐し、時不海の上人の呼が如き聲の聽き驚て之を見まひし。も都てこれぞとて、物もつんえさず。頃時あて甚小き神の浪は穂より蘿摩殺と船とて乘。鷓鴣の羽を衣とて服海湖に從り歸來するものあり。大國主神、おの小され神と怪とおがり。之を掌の上置り、翫まひし。忽跳り其類を齧はき。その神の名を問たまふも。答もえせざり。所從の神を問すも。皆知すと白すゆゑ。久延毘古を召り問たまひし。此の産巢日神の御子少毘古那の神ありと白すゆゑ。神産巢日御祖命

小白上。六實。此の吾指問より滴墮し子あり。よく愛養て汝葦原の色許男命と兄弟となり。其國を作堅くと答告す。みし。爾より此少毘古那の神と相並り。天下を經營り。田疇と畫し。賦役と拘り。凡て百姓と安輯すべき事を爲り。國土を作堅たまひ。青人草及牛馬雞犬などの爲り。其病を療す方と定め。野鳥狐狸の怪を。蝗蝻の田畠を損ひ。稻苗を傷む。此害を攘んため。其禁厭の法を定め。我豊葦原の瑞穂國ら。五穀豊饒り。穀味の美とこと。世界無比類。膏沃の良地。其土地に生出す米穀菜蔬と喫ふ人の魚鳥の肉すら。多く喫て。身體の摂養を妨害あり。況て獸肉の神明の禁たまふものあり。唐土の例をりて。あれと律すべきことあり。故に天武天皇の御世に。天下を勅し。

いまだ成さるるを經歷て。遂に^ひ出雲の國に到り。あれ^あ葦原の中つ國
りより^あ荒芒ののち^いに。村ごと^い私^いの君長あり。頗強暴相聽從さ
るものも多かり。吾已^い不^い摧伏^いと和順さるものもなきこと。僻境あり。徳化
の普く届さ。所をたもあぬ。吾一身の^いあて。あれ^い輔^いるものなきをいふ
せんやとのさしひつ。あな^い躊躇^いてし^いゆ^い。時^い忽^い神光^いの海^いを照^いて。浪^い乃
上^い浮^い出^いるの^いつ^い。大^い已^い貴^い命^い。り^い吾^い在^いす^い汝^いの^いあ^い。能^い此^い國^いを平^いせん
や。吾^い在^いふ^いより^いと^い。かく^いも^いも^い大^い造^い功^い績^いを建^いる^いあ^いと^い得^いる^いあ^い。あ^いあり
知^いを^いや^いし^いひ^いら^いる^い大^い已^い貴^い命^いの^い駭^い疑^いと。左^いり^い汝^いは^い誰^いと^いや^いと^い問^いた^いす^いひ^いれ^いば。
神^い人^い對^いし^い吾^いの^いと^いは^い汝^いが^い幸^い魂^い奇^い魂^いあり^いとの^いり^い。此^い幸^い魂^い奇^い魂^いの^い上^いは^い
具^いし^い徳^い用^いと^いり^いと^いら^いれ^い名^いあり^い。此^い幸^い魂^い奇^い魂^いと^い合^いて^い和^い魂^いと^いし^い幸^い魂^いと^いん。

身^い不^い受^い得^いたる^い識^い量^いの^い優^い劣^いの^い徒^い不^い萬^い理^いを^い記^い得^い衆^い勢^いと^い總^い宰^いと^い一切^いの^い事^い
物^い不^い應^い答^いる^い。受^い得^いたる^い幸^い福^いを^い全^いふ^いする^いの^いり^い。人^いも^いと^いと^い一^い身^いと^い
爲^いども。神^いの^い氣^いを^い以^いて^い躰^いと^いな^いら^い故^いに。祭^い祀^い奉^いう^い社^い毎^い不^い御^い魂^いを^い裂^いく
在^いと^いと^い以^いく。や^い裂^い魂^いの^い義^いあり。や^い一切^いの^い事^い業^いより^い萬^い事^いと^い識^い神^いの
中^い不^い藏^い外^いより^い來^いる^い物^い不^い應^いじ^いる^いを^いま^いは^いし^い判^い別^いて^い僻^い錯^いと^いら^い不^い思^い
議^いの^い妙^い用^いある^いを^い以^いく。その^い靈^い異^いと^いら^いれ^い徳^い用^いと^い奇^い魂^いと^いひ^い。この^い兩^いの^い
徳^い用^いと^い和^い合^い融^い通^いたる^いを^い和^い魂^いと^いひ^い。此^い幸^い魂^い奇^い魂^いの^い人^いを^いめ^いと^いより^い鳥^い
獸^い魚^い一切^いの^い物^い不^いれ^いく^い受^い具^いる^い生^いを^い保^いる^い。荒^い魂^いと^いひ^い荒^い荒^い
暴^いの^い意^いされ^いども。こ^いは^いあ^いら^いあ^いれ^いの^い詞^いは^い生^いを^いあ^いと^い訓^い麤^いと^いあ^いこと
訓^い廢^いを^いあ^いれ^いと^い訓^い義^いあり^い。荒^い魂^いと^いひ^い生^いを^い出^いたる^いま^いは^い魂^い不^い壁^い言^い王^いの



卷

十



大名
持命
奇魂
問答
の處

いほふ珠磨ミシヤを加まざるを荒王アハシとのかが如ごとく。まは人の世よは生な出まるる身みも。
老廢オホシぬれば終つひは死しふらるるが如ごとく。あは荒魂アハシの中ちに幸魂サキミ奇魂キミ和魂ニギミの
三さんと含藏あはてる。人畜ヒトウチ草木クサキの上うへにあるる。と色いろくは生な死し榮枯エイコの同おなじらる。何なにら
て。神かみと人ひととの違ちがひあれども。受得うけるるとらは魂たまの根元ねもともち差別さべつあらず。
故ゆゑに大己貴命オホニギハヒノミコトの自みづか己みづか獨ひとりあらるる。此国このくにをつ作つく竟難つひがたと憂うれひまひらるる。此幸このさい
魂たま奇魂キミの志こころがた潜藏ひそかる。發現あらわれず。あら荒魂アハシはなくも。和魂ニギミのなまられ
ば。造化さうの神かみ法ほう。別べつは和魂ニギミの象さうを現あらわせるる。わかくは教示きやうじさまひらるる。是これ
を以もつて大己貴命オホニギハヒノミコト忽たち然まはら了悟りやくたまひらるる。唯然ただと。迺なほ汝なをこれ
吾幸魂われさいさい奇魂キミをらるることを知しるる。汝今何なんぢいまなにの處ところにあるる。住すんといはるる。と
のこまひけますべ。あらふは於おからくは神人かみ對たいて。吾われ倭やまとの國くには三諸山さんしよさんにあるる。住すんと

欲ほとあらるる。故ゆゑに宮みやをた彼か慶けいの宮みやにあるる。就居すまむ。あら三輪さんりんの御神みかみなり。
その教しゆの隨まり齋祠さいしたまひらるる。和魂ニギミ満み足たりて洪福こうふくをた得え。天下あまを普あま
く經營いどう竟つひさまひらるる。この幸魂さいさい奇魂キミの發現あらわれず。諭たまはらるる。あらふはるる。と
大己貴命オホニギハヒノミコトも。向來むきやうの功績こうせきは。悉ことごとく造化さうの自然じぜんなるる。とらはらるる。成なりるる。
自みづか己みづかの力ちからあらるる。あらるる。了悟りやくたまひらるる。此三輪このさんりんの社やしろ今いまの御殿みどのに
あらるる。あら山やまにあるる。拜奉らいほうこと。如何いかなるる。故ゆゑにあらるる。あらるる。崇神かうじん天皇てんかうの御世みよ
に。あらるる。齋孫さいそん大田おほの根子ねことらはらるる。三輪さんりん大神おほの祭礼まつりをつ司つかさどるる。あら高橋たかはし邑むらの人ひと
活日かつひと大神おほの掌酒てのうとらはらるる。神酒かみをあらわるる。神宮かみにあるる。あらるる。とらはらるる。
天皇てんかうの御歌みうた。三輪さんりんの殿とのにあるる。且かつ戸ともちと詠よせらるる。あらるる。且かつ戸とをあらわるる。とらはらるる。
のこまひけますべ。あらふは於おからくは神人かみ對たいて。吾われ倭やまとの國くには三諸山さんしよさんにあるる。住すんと

幣へいのりりりこともももええ。まま三輪明神さんりんめいじんはは詣まがてて。戀慕こいぼふふ女おんな逢あふふ。ああゆゆくく成なり
祈いのふふ社やしろのの戸とのの開あけけららうう。ななどどもものの心こころをを。神やしろ社ののの有ありりここのの明あららるる
とと。偶たまふふああままとと造つくららわわをを。群ぐん鴉すず来き。喝つ破ぱ。ななどどもものの心こころをを社やしろのの心こころが
神かみのの意いめめてて。いいつつととななくく社やしろのの廢すくく。山やまをを拜あがむむここととににななりりししもも此こゝ和わ魂たまをを
祭まつ祀まつ奉まつふふよよううとと然しかるるああやや。いいづづももああもも凡おん慮りのの側そばががたたここををここもも
ぬぬここ

日本國開闢由來記卷一終

